

家政学

1 家政学の定義

家政学は、「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」

(『家政学将来構想』日本家政学会将来構想特別委員会 1984年)

家政学は、それを必要とする国においてそれぞれの文化、歴史、生活実態に応じた定義をもつ。日本でも、慎重な協議を経て、上記のものが最終的定義とされている。

家政学が考察の対象とするのは、「人間」と「生活」であり、「生活」における「人間と環境との相互作用」である。ここでいう「生活」とは、人格をもった人間としての生活であり、生命の維持から生涯を通じた豊かさまでを含む。すなわち、「生存」「より豊かに生きること」「生涯を豊かに過ごすこと」を含んだ総合的な生きる営みである。

また、現代社会において、個人の生活のありようは多様であり、生活の単位は厳密な意味(古典的な意味合い)での「家庭生活」であるとは限らない。しかしながら、家政学が考察の対象とするのは、人間がその周辺のモノ・こと・人との相互作用を繰り返しながら、最適で持続可能な生活実現に向かう生活の行為・マネジメントであり、その過程で形成される生活の基盤を重視する。個人の全体的な帰属が保障され、生きていく時間の継続性が保障される生活基盤の形成である。

今後ますます多様性が増し、リスクが高まる社会においては、個人がそのまま直接社会にさらされるような状況が強まっていく。このような状況の中で、多様な個人にとっての最適で持続可能な生活が守られるためには、個人と社会の間に個人の帰属を保障する生活基盤をつくる必要があるとあり、それは衣食住を中心とした日常生活の積み重ね、生活資源の適切なマネジメントによって行われる。

「家庭生活を中心とした人間生活」としているのはこのような意味合いにおいてであり、生活基盤の形成とそこを拠点にして展開される人間の生活そのものを研究の対象としている。

家政学によって形成される生活基盤は、人間のプライバシーを守りつつも、隔離されてい

るのではなく開放的であり、外に広がる様々なレベルの環境と相互に関係し合い、全体としてその人の生活空間を形成する。年齢や身心状況に左右されない参加の機会もあり、安全・防災の保障も満たされている。その外側には社会保障セーフティネット、豊かな社会資本、特有の自然 気候 文化 歴史 がある。このように、家政学の関心は、生活の基盤を中心として、その形成に必要なより広い生活環境全般へと拡大する。

2 家政学に固有の特性

1) 家政学に固有の視点

家政学に固有の視点は、トータルな人間と生活への関心であり、人間の視点で生活全体を俯瞰する考察である。

継続性、定着性といった生命の論理及び家族の論理と、生産性、効率性、協働性といった社会の論理から編み出される人の生活を対象にする家政学の特性は、他の科学にはみられないものである。

家政学は、生活の質の向上、人類の福祉に資することを目的とした実践科学であり、事象の客観記述の記載、因果関係の立証といった理論科学の目的のみならず、「生活の質の向上」とは、何をもちて向上というのか、それは何故かという客観的解明が必要となる。そのためには統合の要である「家政観」を科学の基礎として共有する必要がある。

時代の変化、社会の変化に対応しつつも、人間としての生活の普遍的・本質的な価値をその核に据えて、研究・活動を展開することが求められる。

家政学のもつ生活の価値としては、安心、安全、健康、快適さ等に加えて、弱者への配慮、ジェンダー価値も含まれる。また、リスクの多い今日においては、特に、復元力も重要である。

家政学は、生活の主体である人間が生活手段を活用して、生活価値・生活欲求を実現させていく主体的な過程を重視し、「習慣化され受動的になりがちな生活」の顕在的・潜在的問題点を指摘し、どうすれば「主体的で創造的な生活」を実現できるかを追求する点に特徴がある。

家政学の専門家が備えるべき不可欠な要件としては、以下の3点がある。

・個人、家族の日常生活における基本的なニーズ、及び関心事に焦点を当てていること。そして、それらの重要性を共同体、社会、グローバルな視点で捉え、常に変化し、新たな課題が生起している現代社会において、個人・コミュニティのウェル・ビーイングが

充実するよう注力していること。

・個別学問領域を超えた視点での調査研究や関連の理論的パラダイムを通じて、多様な分野の知識・プロセス・技術を統合していること。

・個人・家族・コミュニティのウェル・ビーイングを促進し擁護するための、批判的・変革的・開放的な行動を起こすことができること。

2) 多様なアプローチ

「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」との定義にみられるように、家政学の研究方法は、目的、対象と並んで家政学の学問体系の中で重要な位置を占めている。

一つの要素に関する細分化され、深化された学問成果だけでは家政学の独自の研究たりえない。分化し精緻化された成果や知見を家政学としての独自の視点で統合していくことが求められる。

家政学における多様なアプローチの一つ目には「**自然科学的方法と社会科学的方法の統一**」がある。

家政学が対象とする生活そのもの、および、それをとりまく環境は、人間を含む自然と人間がつくる社会と両者から成り立っているということに拠り、家政学の研究方法は必然的に自然科学と社会科学の統一となる。

自然と社会は、家政学にとってはその対象の二つの切り離された部分ではなく、元来統一されたものの二つの側面ということである。たとえば、食生活、衣生活、住生活、生活経済のどれ一つをとっても、自然科学と社会科学の協同作業なしには問題自体の解明が不可能である。

この二つの領域の研究を人の視点によって統一することによって成り立ち、組み立てられた科学として、家政学は、人がよりよく生きるという中核的理念に収斂される研究成果を各領域科学が展開するという方向性において統合される。

二つ目には「**実践的方法**」があげられる。

実践的研究方法は、環境変革を意図する家政学の研究方法として重要である。このアプローチによって家政学の研究は理論から現実へ貢献しうる生きた理論となり、その結果をもって現実を改造し変革する機能を発揮することになる。

その意味で、家政学に関する教育が肝要であり、家政教育・家庭科教育などがあげられる。

以上のことから、家政学の研究・活動は、大きく、研究、日常生活上での実践、教育、

社会的領域の4領域にわたる。

- ・学問領域として：専門職や社会のために新しい学者を教育し、研究を行い、新しい知識や考え方を創造すること。

- ・日常生活分野として：人間の成長の可能性を開拓し、基本的欲求の充足を満たすための世帯、家族、コミュニティをつくること。

- ・カリキュラムとして：生徒が自らの生活の中で使える自分の資源や能力を発見し、更に開発できるように、彼（女）らの将来の選択や生活能力を準備すること。

- ・政策に影響や発展をもたらす社会的領域として：個人、家族、コミュニティをエンパワース、福祉を向上させ、快適な生活の実現、及び持続可能な将来を創り出すことを促進するような政策が形成されることに寄与する。

上記4領域にわたる活動を行い、家政学は常に進化し、その実践方法も常に新しくされる。

3) 家政学の役割

- ・人間はその周辺にある環境・物・人との係わりを持ちながら生活を営んできている。より質の高い生活を営むためにどのように生活を選び組み立てるかは、人間が生きる上での最も大切な意志決定の一つである。

- ・社会は、人間生活の集合体であり、個々の生活がその社会の基盤であることから、生活をいかに営んでいくかは社会の質を左右する大きな要因である。そのため、生活者の立場からは、生活を取り巻く社会の進歩や多くの学問分野の成果を生活の中にどのように取り込んでいくかという実践的課題について、総合的に判断する事が必要である。経済発展を基盤に考えられる産業の変化や、細分化され先鋭的に行われる諸学問の成果を組み込みながらの実践的な生活上の問題解決の研究が家政学である。

- ・豊かになった現在の日本の社会では、かつてのように不足する物をどのように補って合理的に生活の質の向上を図るかといった問題ではなく、どのように自己の生活を規定し、選んでいくかが問題になる。生活を取り巻く技術の進歩はめざましく、物資も豊富に存在し、社会制度も変化する中で何に価値をおき、どのような生活を営むかを具体的な問題として提起し、解決していく事が必要とされている。

- ・以上の活動を通して、生活の価値を公共的な領域にひろげて新しい社会的価値を創造することが課題である。

4) 他の諸科学との協働

家庭生活を中心にした人と人、人と物、および家庭生活とそれをとりまく環境とのかかわりを明らかにするという家政学は、トータルなシステムの中で家庭生活をとらえ、エコロジカルな視点で人、モノ、こと(家庭生活、コミュニティの生活)を研究し、実践的課題に応

える。

したがって、その対象は、多面的、総合的に営まれている人間の生活を研究対象とし、同時に地域コミュニティ、全体社会、地球規模での国際的動向と不可分の関係におかれ運営されている生活である。このことから、多種多様な学問分野と関連し、学際的、越学問的(transdisciplinary)な研究による知見を統合する。

隣接諸学問分野の知見の結合は家政学にとって極めて重要である。

家政学に係わる科学分野は、食物学、被服学、住居学、児童学、家庭経営学、家政教育学の6領域(1973年「家政学将来計画委員会報告」とされていたが、それぞれの領域は、更に、経済学、経営学、農学、社会学、法学、心理学、医学、教育学、体育、工学、歴史学、人類学、民俗学などはすべて家政学の隣接領域であり、こうした隣接領域を中心とする様々な学問分野から知見を取り入れることは家政学の強みであり、これにより、ある課題に対する家政学の説明能力が拡大、発展していく。

このような学際性は、最適で持続可能な生活を達成するという目的とあいまって、家政学が政治的、社会的、文化的、生態学的、経済的、技術的なシステムに関わり、変革を促していくことで、社会におけるあらゆる側面に影響を与える可能性をもつことを示唆している。

家政学の研究は、食物、被服、児童などの個別領域内部に限定されるテーマで行われる場合と、家政学の多領域の研究者による共同によってでなければ解明できないテーマ研究とがある。後者の場合にはおのずと隣接諸学問との協働による学際的な研究方法が用いられるが、家政学の場合、個別領域の一人の研究者の限定されたテーマでの場合も、必ず全体の中にその部分を置いて全体の中に位置づけるという方法、全体的・総合的方法がとられることが重要である。

たくさんの方を出している

家政学成立の経緯

家政学は、学問としての成立が他の隣接諸科学よりかなり遅れたこと、加えて、家政学なりの成立のいきさつを背負っていることも特徴としてあげられる。

ホーム・エコノミックスの起源は古く、ギリシア時代にさかのぼる。

古代ギリシアの哲学者たちは、人間生活の最も基本的な場として、家をめぐる諸問題を考察した。家政学(オイコノミカ oikonomika)は、ギリシア語で家を指すオイコス(oikos)と法や

秩序を意味するノモス(nomos)に由来し、家の秩序をもたらすための家政術を探求する学として位置づけられた。

ソクラテスの弟子クセノフォン(前 430～354)が著した『オイノミコス(家政を司る人)』では、オイノスは農耕を営む家を指すと同時に、生活に有用な財産の総体という意味で使われている。続くアリストテレス(前 384～322)『オイノミカ(家政学)』では、家における財政術、家政の原理や掟、人間相互の倫理的関係などが論じられている。そこでは、オイノスがポリスに先立つ最初の共同体として位置づけられている。

近代家政学の成立は、1899年～1908年に開催されたアメリカのレークプラシッド会議、それに続くアメリカ家政学会の設立を機とされる。アメリカ家政学会の第1回会議において、Home Economics : 家政学という学問名称が定められた。

日本で「家政学」の名称が教育分野で正式名称として使用されたのは、1948年新制大学家政学部発足時である。

家政学の呼称については、国内外を問わず多くの議論があり、日本では、かつて家政学部と称していた学部が名称変更して「生活科学」「総合人間科学」等の名称を冠しているところもある。